

平成 27 年度通常総会・理事会開催報告

日 時：平成 27 年 6 月 30 日（火）15 時～16 時（総会・理事会議案審議）

場 所：明治記念館 富士の間 1

出席者：理事；18 名中 18 名（委任状含む）

会員；70 社中 64 社（委任状含む）

日中建築住宅産業協議会は、今年 2 月に設立 30 周年を迎えました。

6 月 30 日（火）に平成 27 年度通常総会・理事会を東京都港区元赤坂の明治記念館で開催し、30 周年記念事業として、総会・理事会に引き続き 30 周年記念式典、記念講演、記念パーティを執り行いました。

総会・理事会は、樋口会長を議長として、各委員会・部会の平成 26 年度の活動報告を始め、平成 27 年度の事業方針や事業計画案、新規入会企業の承認などの審議と当協議会設立 30 周年に関連する予算案についての報告などが行われ、全ての議案が承認されました。



その後、30 周年記念式典、記念講演、記念パーティが開催されました。記念式典では、直近の 10 年において、協議会の発展に貢献をいただきました方を表彰し、感謝状と記念品を贈呈しました。記念講演は、講師に作家の浅田次郎氏をお迎えし 265 名にご参加いただき、歴史的、文化的な視点から中国についてのお話をいただきました。また、記念パーティは約 300 名の方にご参加いただき、この日のために、中国から中国建築設計研究院とそのグループ会社である深圳華森建築工程設計顧問有限公司より 6 名が来日いただきました。パーティの冒頭には、日本と中国、そして日中建協の 30 年を写真で振り返り、懇親会場では中国の民族楽器が演奏されるなど華やかな雰囲気のもと盛会裡に終了しました。

開会の挨拶：樋口会長

日中建協は 1985 年 2 月に設立されました。建設省から日本建築センターの理事長にご就任されていきました澤田先生と松下電工の丹羽会長、そして大和ハウス工業の石橋会長の 3 人が発起人的な役割を担ってスタートしたと聞き及んでおります。1985 年当時は、中国の情報はほとんどなかった時ではないかと思えます。日中建協が設立された主旨も、中国と日本の橋渡しをするということでした。

日中建協の発足時は会員企業が 98 社でした。過去 30 年の中で会員数が一番多かった時期ですが、2000 年くらいから徐々に会員が減っていきました。私は 2009 年 6 月に会長を引き受けましたが、その時は 33 社まで減っていた会員が 84 社まで増えてきました。いま現在は出入りが多少ありましたので 81 社です。日中建協にとって、この 6 年間の変化は非常に大きいと思っております。

ただ、今日があるのは、30 年前の情報も連絡手段も何もない時代に日中建協を設立いただき、訪中団を派遣したり、大変なお骨折りを頂いてきたからこそだと感謝しております。今年 30 周年を迎えることができましたが、原点を忘れることなく、1985 年に設立発起人として協議会を立ち上げていただいた 3 人の方々に感謝すると同時に、一度 33 社まで減った会員数を 80 数社まで伸ばして頂いた、理事の皆様や会員の皆様に厚く御礼を申し上げるとともに、これからの日中建協と日中の関係が益々発展していくことを願ひまして、冒頭の挨拶にかえさせていただきます。

ご来賓挨拶：国土交通省 住宅局 住宅生産課長 林田 康孝様（役職は6月30日）

協議会設立 30 周年、誠におめでとうございます。これまでの長きに渡り、日本と中国の間の交流と協力に多くの貢献をされてきたことに敬意を表したいと思います。2012 年 5 月に締結されました中国との「協力意向書」に基づく日中間の住宅モデルプロジェクトで、特に上海の緑地集団、常州の新城地産、大連の億達集団の 3 つにつきましては、日中共同でモデル棟ができるなど、具体的な進捗があり具体的な成果を挙げてきています。会員の皆様方のご協力ご尽力の賜物と考えております。

国土交通省でも特に近年、海外向けのインフラ輸出や技術移転などに力を入れようということで、新たにプロジェクトを立ち上げたりしておりますけれども、30 年も前から日中間でこういった民間同士の橋渡しをするべく取り組みを進めてこられたということには、頭が下がる思いでございます。

これからも日中建協の皆様方にはますます団結していただき、30 周年と言わず、今後 50 周年 100 周年を迎えられますよう、ますます隆盛を極められますことを心からお祈り申し上げます。

ご来賓挨拶：経済産業省 製造産業局 住宅産業窯業建材課長 寺家 克昌様

日中建築住宅産業協議会が 30 周年を迎えられましたこと誠におめでとうございます。

日本の経済は安倍政権になりまして約 2 年半が経過をして、経済の好循環というものも確実に動き始めているのではないかと考えています。住宅産業は少し回復が見えてきていますが、協議会の会員各社の方は、将来を見据えて積極的に海外展開を図られるというのだと考えております。

昨年 11 月に日中首脳会談が実現しました。今後、こういった動きが加速するように様々なレベルで対話と交流を進めていくことが、関係改善の流れを確かなものにしていく重要なことだと思っておりますので、そういう意味においても協議会の果たされる役割がますます重要になってくるものと思っております。

今後ますます、日中両国の懸け橋となり、日本の住宅建材産業の発展のためにも貴協議会にご尽力いただきますことを期待するものです。

議案審議

総会議題

- 第一号議案 平成 26 年度事業報告承認の件
- 第二号議案 平成 26 年度収支報告承認の件
- 第三号議案 役員選任の件
- 第四号議案 平成 27 年度事業計画（案）承認の件
- 第五号議案 平成 27 年度予算（案）承認の件
- 第六号議案

理事会議題

- 平成 26 年度事業報告承認の件
- 平成 26 年度収支報告承認の件
- 新規加入会員承認の件
- 役員互選の件
- 平成 27 年度事業計画（案）承認の件
- 平成 27 年度予算（案）承認の件

本年度の総会・理事会は、30 周年記念事業を執り行うため、例年、総会・理事会の後開催する意見交流会は行わないこととしました。上記をもって、平成 27 年度の総会・理事会は終了し、引き続き、30 周年記念式典として功労者表彰が執り行われました。

総会・理事会の報告内容と決議事項は、会報誌「日中建協 NEWS」No.217 号（9・10 月号）詳しく記載しています。

記念式典（功労者表彰）

当協議会の運営は、中国側の協力や共同体制と共に、日本においても政府及び関係機関のご指導を得ながら進めてきました。特に、当協議会の運営の主体は、各委員会が中心となってイベントや発行物、中国側への対応などを企画し実施しています。

この度、30周年を迎えるに当たり、当協議会の活動を長年にわたり支えていただきました方を功労者として表彰させていただくことといたしました。功労者の基準は、会員企業のうち、直近の10年間に於いて委員会の委員長を一定期間以上務めていただきました方、また、委員会活動に長年携わっていただきました方、さらに、会員としてではなく、当協議会へのご支援を継続的にいただいております方2名も対象とさせていただきます。

総会・理事会終了後、そのまま引き続き記念式典として功労者表彰を執り行い、次の12名の方に、樋口会長から一人一人に対して表彰状（感謝状）と記念品が手渡されました。

功労者表彰 当協議会会員

社本 孝夫様（株式会社日本建築住宅センター） 運営委員長：平成21年6月～平成25年5月

手嶋 秀次様（クリナップ株式会社） 情報委員長・情報提供委員長：平成11年8月～現在

高井 聡様（パナソニック株式会社） 設備材料部会長・調査統計委員長：平成17年6月～平成25年3月

笹井 俊克様（一般財団法人日本建築センター） 事業支援部会長：平成22年6月～平成27年3月

森本 潤様（YKK AP株式会社） 事業企画委員長：平成22年6月～現在

吉田 備実様（ミサワホーム株式会社） 交流委員長・広報委員長：平成23年3月～現在

満田 将文様（大和ハウス工業株式会社） 交流委員長：平成16年9月～平成22年5月

鈴木 由美子様（TOTO株式会社） 情報委員会・広報委員会・調査統計委員会：平成3年～現在

佐藤 泰司様（ミサワホーム株式会社） 事業委員会・情報委員会・運営委員会：平成7年～現在

平郡 美果様（積水ハウス株式会社） 事業委員会・交流委員会・広報委員会：平成15年～現在

関係機関の方

小島 麗逸様 会報誌連載執筆：昭和60年～現在

袁 曉春様 メールマガジン情報提供：平成22年10月～現在

当協議会の30年、特にここ数年は、会員数が大幅に減少し委員会の活動も充分に行うことが出来ないという状況から、会員企業の中国事業にとって役立つ協議会であるべく、その活動の充実を目指して新たな取り組みを進めてきました。

当協議会が中国の建築・住宅分野に貢献し日中交流がますます発展していくために、12名の功労者の方を含む全ての方々に感謝をすると同時に、今後への礎とするために、30周年を一つの節目として記念式典が執り行われました。



記念式典（功労者表彰）については、会報誌「日中建協 NEWS」No.217号（9・10月号）詳しく記載しています。

30周年 記念講演



日 時：2015年6月30日（火） 16：30 ～ 17：45

場 所：明治記念館 富士の間2

講 師：浅田 次郎 様（作家）

テーマ：「近代中国と日本」

参加人数：265名

毎年秋に開催しています講演会を、今年は30周年記念事業として、平成27年度総会・理事会に合わせて開催をいたしました。

私たちは、中国ビジネスに携わる者として、日頃より経済的な視点から見た講演やセミナーなどを聞く機会は多くありますが、今回は、中国を歴史的、文化的な視点から見たお話を伺うことが

できました。普段私たちが捕える中国とは違った角度から新たな中国に触れたことにより、中国の新たな魅力や奥深さを改めて発見することができた瞬間でした。講演の内容を一部ご紹介いたします。

浅田次郎様 講演

今日は『近代中国と日本』という演題なのですが、皆様は中国に関してはエキスパートでいらっしゃると思います。もしかしたら、間違ったことを言うかもしれませんが、小説家というのは嘘をつくのが商売でありまして、ただし、歴史小説を書いていますと嘘をついても、その嘘に責任を持たなければならないということになるのです。フィクションを書くにあたって、歴史的な背景や歴史的事件というのは、できる限り精密に調べて、そのうえにフィクションを構築して行くという心構えがないと長くは続きません。歴史というものは、やはり自分がもともと好きで、しかも、ある程度の積み重ねがなければ、書くことはできないということはいえると思います。私はいろんな種類の小説を書いています。中国を舞台にしたものもありますし、日本を舞台にしたものもありますし、戦争文学も書いています。ただ、いろんなものを書いているようでありながら、実はそうでもなくて、違う角度から見ると、ここ150年の歴史しか書いていません。

歴史を学び始めた発端は日本の歴史ではありません。中国の歴史を先に学びました。しかも、最初は歴史ではなく文学でした。小説家になったのですから歴史より文学の方が好きでありましたが、どうして中国の歴史を学ぶようになったのかについては、ちょっと面白い事情があります。中学1年になりますと、私たちの世代は漢文を習いました。いろんな漢詩をそらんじさせられる訳ですが、その漢詩に出会った時に、世の中にこんなにも美しい言葉があるかというふうに思いました。最も感動したのは、陶淵明の詩です。漢詩と言うと、普通は李白や杜甫が代表的な作家なのですが、私が素晴らしいと思ったのは陶淵明でした。陶淵明は李白や杜甫よりずっと前の時代の人です。陶淵明の時代は、唐代以降の定型詩の形というはできていなくて、七言律詩とか五言絶句だとかがまだできていないのです。だから、とても自由な形で詩ができていました。陶淵明の代表作に『帰去来の辞』というものがありますが、中学か高校で必ず教科書に出てきたと思います。「帰りなんいざ、田園まさに蕪れなんとするに、何ぞ帰らざる」。読み下しがとても綺麗ですね。まさか中国人がそのように指導した訳ではなくて、中国の漢詩では全然別の中国語の読み方があるにもかかわらず、日本人がそれを読み下すと、こんなに美しい日本語になるということです。私は、陶淵明の『帰去来の辞』に接した時に、これは素晴らしいと思ひまして、それからは中学校の図書館に通い詰めて、いろんな漢詩を読んで一人悦に入っていました。

そうこうしているうちに、1人の作家に巡り会いました。南宋の陸游という詩人です。日本ではあまり有名ではないのですが、この人は大変美しい星空の詩をたくさん書いています。ところが一方では、世の中を非難し、今の世の中を憤慨する政治詩というものもたくさん残しています。この二つは全然語調が違うのです。ロマンチックな詩とリアルな詩です。

私は、このロマンチックな詩が大好きで、もう一つの激烈な政治詩、政治を批判するような詩はどうも好きになれませんでした。日本人はみんなそうだと思います。日本は不思議な国で、文学は政治や思想に関わるべきではないという不文律があります。誰が言い始めたのかは知りませんが、はっきりわかるのは、平安時代の最後にあらわれました藤原定家という歌人が、「紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」と嘯きました。平安末期、鎌倉の初めというのは動乱の時代です。それまでの貴族政治が崩壊して、平氏の実権、つまり武家の政治に移り、兵士が実験を持って行ってしまった。なおかつ、その平家を倒した源氏が、京都ではない他の場所に政府を作ってしまった。これは大変なクーデターです。これが他の国であれば、おそらく天皇家が滅ぼされて、新しい王朝ができるというパターンなのですが、日本はそうはならなかった。これが源頼朝の天才的などころであって、誰が発想したのか、天皇は象徴としてそのまま京都に残し、鎌倉に自分たちの政府を作ってしまうということです。そういった動乱の時代に生きた藤原定家は、やはり歌詠みとしてゴタゴタした世の中には関わらない。関わってしまったら美しい歌は詠めないという考え方だったので、「紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」と言っていて、戦の旗や異民族を征服しようなどという考え方は、私は一切関係ないという宣言をした訳です。これが連綿と日本文学の伝統になっていまして、政治や世の中のことに文学者は立ち入るべきではないという姿勢をずーっと貫いてきているのです。

この後、中国の文学と政治家との関係について、科挙の試験の歴史から袁世凱のコンプレックスに関するお話に至り、また、『蒼穹の昴』から中国4部作となる『珍妃の井戸』『中原の虹』『マンチュリアンレポート』へと続いた訳などを歴史の流れとその意義などと共にご紹介いただきました。

もちろん日本と中国の比較論にも話は及び、そして、歴史を学ぶことの意味は、自分の幸福や不幸のありかを確認することであるという哲学。その哲学に基づき、歴史小説を書くことにより世の中の役に立ちたいという思いが語られました。

私達中国ビジネスに携わる者としては、経済的視点だけで中国を観るのではなく、文化を含めて歴史をきちんと知ることが大切であると思います。今回の講演会では30周年にとってもふさわしいお話をいただきました。

講師 略歴

1951年 東京生まれ

1995年 『地下鉄(メトロ)に乗って』(徳間書店)で、第16回吉川英治文学新人賞を受賞

1997年 『鉄道員(ぽっぽや)』(集英社)で、第117回直木賞を受賞

2000年 『壬生義士伝』(文藝春秋)で、第13回柴田錬三郎賞を受賞

2006年 『お腹召しませ』(中央公論新社)で、第1回中央公論文芸賞、および第10回司馬遼太郎賞を受賞

2008年 『中原の虹』(講談社)で、第42回吉川英治文学賞を受賞

2010年 『終わらざる夏』(集英社)で、第64回毎日出版文化賞を受賞、日本ペンクラブ会長

2015年 紫綬褒章授章

主な著書

『プリズンホテル』シリーズ 『天切り松 闇がたり』シリーズ

『蒼穹の昴』 『霞町物語』 『シェエラザード』 『沙高樓奇譚』 『憑神』 『夕映え天使』

『天国までの百マイル』 『椿山課長の七日間』『五郎治殿御始末』 『月下の恋人』 『輪違屋糸里』

『月島慕情』『一刀斎夢録』 『赤猫異聞』 『一路』 他多数あり

近著は、日本経済新聞出版社より『黒書院の六兵衛』

講演内容については、会報誌「日中建協 NEWS」No.217号(9・10月号)詳しく記載しています。